

中国開発学試論 : 先駆的研究者のあゆみからひもとく

著者	汪 牧耘
出版者	法政大学国際文化学部
雑誌名	異文化. 論文編
巻	22
ページ	107-129
発行年	2021-04-01
URL	http://doi.org/10.15002/00024085

〔論文〕

中国開発学試論

——先駆的研究者のあゆみからひもとく——

Discussion on Development Studies in China from Analyzing Academic Leader's Experiences

東京大学大学院新領域創成科学研究科国際協力学専攻 博士後期課程

汪 牧耘

Wang Muyun

要旨：人間の生活や自然環境に大きな影響を与えてきた「開発」は、どのように学問の対象になったか。この問題意識をもとに、本稿は、中国人研究者・李小雲氏の開発観に焦点を当て、その開発観から逆照射することで見えてくる中国の開発学の特徴を仮説的に提示する。李氏は、論文や本の執筆だけではなく国内の農村開発にも従事しており、学術と実務の両面で成果を多くあげたことで「開発学の父」と呼ばれている。李氏が歩んできた道を手がかりに、中国における開発学を議論する素材を提供することが本稿の目的である。

キーワード：中国の開発学、先駆的研究者、開発観、理論、経験

1 中国の「開発学」(development studies)¹とは何か

開発 (development) という事象が学術的に論じられるようになったのは、1950年代頃である。60年代から70年代に議論が活発になり、

1 development studiesの日本語訳は「開発学/開発研究」だが、中国語訳は「发展学/发展研究 (“发展学/发展研究”）」である。本稿では、「发展」を「開発」に統一して表記する。

80年代以降はアメリカ政府や世界銀行の影響で学問としての枠組みが定まってきた。初期の開発学は資本主義の蔓延による世界の激変に強い問題意識を持った政治経済学者の主導のもと、その変化のメカニズムを解き明かそうとするものであった。一方、今日の開発学の問題関心は、政府や国際組織などの開発事業を成功させようとする実務的なものが多く、開発学の知識が生まれるプロセスも、経済学や政策科学の方法論に大いに影響されているとの指摘がある (Bernstein 2006)。

現在、開発学は世界中の多くの大学で一つの専攻として確立している。欧米から発した開発学は、必ずしもそのまま他の国や地域に受け入れられた訳ではない。そもそも、「開発」が具体的に何を指しているのかは文脈によって変化するものであり²、その概念が形成されていくプロセスも国によって異なっている (汪 2020)。また、開発をめぐる諸現象は複雑であり、その解明には多様な研究アプローチや視点が必要である。開発とは何か、それにとって重要な課題や手法とは何かも、その時々を経済的・社会的状況によって変わってくる。

本稿は、中国の開発学を作り出した研究者に焦点を当てることで、国際開発の分野で影響力を増している中国において、開発をめぐる学問的な取り組みがどのような特徴を持つのかを仮説的に提示する。ある学問の創設者や著名な研究者は、その分野の主な知識生産者であるのみならず、研究や議論の潮流を方向付けるような重要な役割を演じている。後継者の研究は、それらの研究者が作り出した既存の言説空間の影響を受けざるをえないからである (Becher & Trowler 2001、ブルデュー 1997)³。学問をリーダーしてきた研究者はどのような経

2 例えば A. トーマスは、開発 (development) の今日的意味を①望ましい社会のあり方に関するビジョン・説明・基準、②社会変化の歴史的過程、③国家や組織による計画的取り組み、と大きく分けている (Thomas 2000: 777)。

3 その点について、ブルデューはフランスの教育体制を事例に、著名な研究者と若手研究者の「共存共栄」をあからさまに描いた。著名な研究者は自らの学術的地位を固めるために若手を育てると同時に、大学や研究機関で自分の

歴の持ち主であり、その論述にどのような傾向があるかは、その分野における知識が生まれる背景を理解する手がかりとなる。

具体的に、本稿は中国農業大学の李小雲 (Li Xiaoyun) 教授を対象に分析を行う。李氏は、中国初の開発学部を設立し、国際開発をめぐる複数の研究者グループを率いているだけではなく、国内の貧困削減と国際的な開発援助にも深く関わってきたことで、学者やメディアからは「開発学の父」と呼ばれている⁴。このような李氏は、どういう経緯で開発学と出会ったのか。なぜ研究にとどまらず開発実践にも関わっているのか。これらの問いに取り組むために、本稿では既存文献の分析を行うとともに、李氏による開発実践の成功例として多くの新聞で取り上げられている雲南省のH村でフィールドワークを行なった⁵。李氏の開発観が形成されてきた過程を整理することで、中国の開発学を議論する素材を提供することを目的とする。

2 「開発」に向かう李氏のあゆみ

2.1 国際開発に携わる農学者

李氏は1961年に中国陝西省に生まれた。1981年に甘肅省の寧夏農学院を卒業し、北京農業大学（現在、中国農業大学）作物生態学専攻で修士号と博士号を取得した。その後、李氏は中国中央農村政策研究

居場所を求める若手は、著名な研究者共同体の規範を受け入れながらその言説を再生産していく（ブルデュー 1997）。

- 4 この呼び方はいつからあったかは確かめ難いが、李氏の学生にインタビューした結果、2000年代からそれを耳にすることがあったという。そして、李氏を「開発学の父」として紹介する報道や記事は2010年以降に多く目に当たるようになったと考えられる。例えば、
 李小雲：這些年，西方援助讓人好過嗎
<http://memo.cfnisnet.com/2015/0821/1302339.html> (2020/10/8)
 李小雲：非洲對於中国發展的四大戰略意義
http://cn3.uscnpn.org/model_item.html?action=view&table=article&id=7653 (2020/10/8)

- 5 調査期間は、2019年8月16日から8月25日までである。

室（当時）で勤務し、肥料や農作物の品種改良に関する研究を行っていたが、1989年に北京農業大学の要請により、旧西ドイツによる援助事業である「中独総合農業開発」の中国側の副代表となった。

その際、ドイツ人専門家から寄贈された『農村開発ガイドライン』をきっかけに、李氏は「コミュニティ」、「参加型」、「ジェンダー平等」などといった国際開発の概念を初めて知ったという（李 2019）。その後、李氏は国際開発を学ぶためにドイツとオランダに行き、1990年代半ばまでオランダのラドバウド大学で開発学の博士課程に在籍していた。留学中の李氏は、開発途上国の実務者のために組まれたカリキュラムを通して国際開発の概念、理論や方法を体系的に知り、その全てを先進的な知識として真剣に勉強していた（李 2019）。

同じ時期に、李氏は国際援助事業を中国に誘導するための「仲介役」を担うようになった。具体的には、外国の政府援助機関や国際組織と中国政府の間での事業をコーディネートすることや、参加型開発をはじめとする国際的な開発理念や方法を紹介する本の執筆に携わることなどがあげられる⁶。そのような経験から、李氏は国際開発の専門家と見られるようになった。

国際開発の理念と手法の普及に向けて、李氏とそのチームメンバーは1998年にアメリカのフォード財団の支援を得て、開発学を中国農業大学の一学部として発足させることに取り組みはじめた。しかし、中国の教育省と農業省はその案を認めたものの、「開発学」という呼び方に違和感を覚えると指摘した。その結果、「開発学」のかわりに、「農村区域開発」という当時の農業系大学として馴染みのある名前が付けられた上で、中国初の国際開発を教える学部設立に至った。農村区域開

6 『農村社区發展規劃導論』（1995）、『誰是農村發展的主体』（1999）、『参与式發展概論』（2001）、『性別与發展導論』（2001）、『社区發展中的兒童参与』（2002）、『参与式扶貧培訓教程』（2003）、『2002中国農村情況研究報告』（2003）、『技術發展与農民参与』（2003）などがある。

開発部のカリキュラムは、フォード財団の支援を受け当時有名な開発学者によって定められており、その内容は欧米の大学の開発学を複写したものと見える（李 2019: 228-231）。2002年、農村区域開発学部は同校の人文社会科学学部と合併し、「人文・開発学部」に名称を変えた。学部の教育内容を明確にするため、李氏が中心的な編著者として、『開発学通論』（李他編 2005）をはじめとする教科書のシリーズを出版し、中国における開発学教育の基本的な枠組みを定めた。

2.2 「西洋的な開発学」への疑い

開発学のいわば伝道者だった李氏が考えを大きく変えたのは、彼が国際開発の「仲介役」から途上国の現場での援助者に身を転じた2000年代であった。中国が著しい経済成長によって世界中から注目されるようになった頃に、専門家としてアフリカを訪れたことが大きなきっかけであった。

国際開発に携わってきた李氏は様々な組織・機関の要請により国内外の開発について研究を行ってきたが、西洋生まれの学問を先進的・権威的なものとして追い求めてきたことで、中国人として多少の劣等感を持っていた。しかし、中国は大きく変貌した。2000年代に入ると、中国は高度経済成長や国内貧困撲滅で成果をあげ⁷、「中国的開発モデル」や「北京コンセンサス」などの議論も活発になった（俞・庄 2004）。

中国が国際社会から脚光を浴びるようになる中、李氏にさらなる自信を与えたのは、2004年5月に上海で世界銀行により開催された「国際貧困撲滅会議」だった。その会議で、中国による脱貧困の実績は、世界銀行総裁（当時）のJ・ウォルフエンソンをはじめとする報告者に頻繁に取り上げられた。彼らの発言によって、李氏は中国人として

7 2000年から2010年までの10年間、中国の貧困人口数は9422万人から2688万人に激減し、国内総生産は10兆280億人民元から41兆2119億人民元まで増加した（『中国統計年鑑 - 2019』より）。

の自尊心を強く感じ、既存の開発学を追い求めるだけでなく、中国で開発をめぐる研究や実践を行ってきたことの価値、李氏の言葉を借りれば彼自身の「主体性」に気づいたという。そうした変化の表れとして、李氏は2000年代半ばから農業技術を普及する専門家や研究者としてアフリカ大陸を訪れた時に、これまでなかった心境を味わったことを以下のように語った。

90年代にアフリカに行った時に、アフリカ人のことを「兄弟」だと心から思っていた。政治的な感覚や、食べる物も着る物も、それほど差がなかった。私も彼らも、何も持たなかったからだ。それとは対照的に、ヨーロッパ出身の友だちとの衣食や持ち物の差がとても大きかった。しかし、2005年、08年以降、私がアフリカを訪れた時に感じたのは、「類似性」ではなく、「差異性」だ。私は、アフリカの彼らを見て、中国の変化に誇りを感じた。⁸

李氏は、当時の自らのアフリカ人への眼差しを、国際開発援助者がかつての自分に投げてきた眼差しと重なっているように見えた。国際開発の理念として、公平、平等や異文化理解などが常に主張されている。しかし、アフリカの現地で李氏が実感したのは、経済や生活水準の差が大きい中で、相手を心から対等に捉えることの難しさであった。このような体験をもとに、李氏は西洋生まれの開発学にどこか「ウソ臭さ」があることや、抽象的な理論ばかり語る開発学者を批判するとともに、自分は開発現場で一体何を感じたのかを誠実に受け止めることこそ、学者になる資格だと主張するようになった。実際の経験を重視する考え

8 2020年、中国農業大学・国際開発とグローバル農業学院の主催により、「中国と国際開発」をテーマとする年会が開かれた。ここでの引用は、「New International Narratives from Chinas Perspective」（2020年10月27日9:00～11:30）というセッションにおける李氏の発言によるものである。

方は、次項で述べるような李氏の研究と実践にも反映されている。

2.3 「中国の開発」の構築へ

「中国・アフリカ協力フォーラム」⁹ (FOCAC) は、中国政府とアフリカの53カ国の閣僚レベル会合として2000年から始まり、3年に1回の割合で開催されてきた。中国国内の農業・経済政策の変化とともに、対アフリカ援助の方向性も変わってきた (Bräutigam and Tang 2009)。2000年代以降、農業セクターの対アフリカ援助は、技術移転に重点を置くようになった¹⁰。そして、2006年のFOCACでは、中国政府はアフリカの10カ国に「農業技術モデルセンター」の建設を援助することを承諾した。

「農業技術モデルセンター」は、その後李氏と彼が率いた研究者グループの調査対象地となっている。現地の「中国援助者」は誰なのか。アフリカでどのような出会いがあったのか。植民地経験や西洋諸国の援助を長い間受けてきたアフリカの人びとは、いかに中国の開発援助を見ているか。李他 (2017) は、それらの具体的な問いかけを現場のミクロな視点で記述した。これまで、中国国内の研究は、中国の開発援助を政策の変遷や共産党幹部の発言をもとに分析し特徴付けるものがほとんどであった (張 2012)。それに対して、李他 (2017) は開発現場における生々しい話を拾い、アフリカの人びとの目から自分自身を見直した点が斬新的であり、国内の著名な経済学者や思想家にも高く評価されている¹¹。

9 参考：中非合作論壇 <http://www.focac.org/chn/> (2020/10/8)

10 李他 (2017) は中国の政策変化を整理し、それと中国の対アフリカ援助の関係を論じた。その結果、中国の対アフリカ援助の中心は、①労働力密集型 (1960~70年代)、②生産責任性 (1970~80年代) ③企業主体の市場化援助体制 (1990年代) ④科学技術の移転 (2000年代以降) へと移り変わっていることを明らかになった。

11 例えば、経済学者の林毅夫や思想研究者の汪暉はその本について推薦のこと

それらの実践を踏まえて、李氏は西洋と中国の開発学を整理し、両者の最大な違いは「理論型」と「経験型」という知識構築のアプローチにあると分析した。すなわち、これまでの開発学は、西洋の学術世界が新自由主義や新制度主義などの理論をもとに、一定の方法論にしたがって作ったものである。それは、今日でも世界中の開発実践を指導し分析する時に常に用いられる権威的な言説であるが、実は多くの開発現場での挫折に繋がっている。それに対して、中国の開発知は、理論的枠組みが先行するのではなく、現場にいる専門家や事業者が個人的な経験をもとに、相手とのやりとりのなかで構築したものであるとした（李他 2017: 94-98）。例えば、世界銀行やアメリカのプロジェクトでは、ジェンダーと開発の理論をもとに、村内会議の男女の参加者数を均等にすることまで厳密な計画があり、それを遵守した事業実施が求められる。それに対して、中国のプロジェクトはそれほど計画を重視しておらず、その時々での現地の状況に合わせて調整していくことが多い（李他 2017）。

李氏からみると、「理論型」のアプローチは現地にふさわしい知識を生み出すことができない。欧米の援助者のように、理論的に正しいことを最初から設定すると、現実との乖離をもたらすだけでなく、自分自身も上から目線になりやすい。したがって、一見合理的な開発計画を作るよりも、自分がどうやってきたか、それは本当に効果があるかどうかを相手にやってみせる方が大事だと考えた。

「繰り返し強調してきたように、私たちは中国がどうやってきたのかを相手国に見せるだけだ。私はそれを『平行する経験』と呼ぶ。社会経済評価、ジェンダーや参加型のトレーニングなど、私たちが西洋的な援助事業を受け入れるために中国の現場でやった

ばを書いた。参考：新書 | 林毅夫、汪暉聯合推薦《新發展的示範》
<https://www.ssap.com.cn/c/2017-11-30/1063767.shtml> (2020/10/8)。

ことはもうやらない。…(略)西洋から学んだ上に中国にとってさえ有用かどうか確かめられていないことを、わざわざほかの途上国で実践する必要がない。」(李 2019: X)

国内外の開発経験をもとに、李氏は大量の論文や著書を発表し、中国政府や数々の社会組織から表彰されてきた。現時点では、李氏が執筆した主な著書だけでも28冊あり、学術論文は120本を超える。統計データをみると、それらの論文がダウンロードされた回数は計9万8000回、引用された回数は計4400回に達している¹²。

研究に多くの実績を出した彼は、中国農業大学の「国際開発・グローバル農業学院」の名誉院長や「中国国際開発研究ネットワーク」¹³の主席など担任し、中国における主要な開発学者グループを率いることになった。それらの研究者グループは、大学教育や研究成果の社会への発信を通して、中国における開発知を中心的に創り出している。さらに、李氏が携わってきた開発現場は、中国農業大学をはじめとする教育・研究機関の学者や学生の調査対象地となっており、中国の開発とは何かを議論する素材を提供している。李氏の開発観は、今日では、中国の開発学の分野において大きな言説空間を占めているといえる。

ここまで、本章では、李氏がどのように一農学者から中国の代表的な開発学者になったか、その開発観はどのように開発学の理論と国際的な現場体験とのせめぎ合いの中で作り直されたのかをみてきた。次に、中国国内における李氏の開発実践に焦点を与え、その開発観を異なる側面から読み取る。

12 中国学術文献オンラインサービス(CNKI)の検索結果により。「作者:李小雲」、「所属:北京農業大学+中国農業大学」、「収録:核心的定期刊行物」を条件に検索した結果、127本の学術論文があった(2020/10/29)。

13 2012年に設立された研究者のネットワークである。国際開発をテーマとして取り組んでいる学者はそのメンバーであり、これまで中国における国際開発関係の多くの学術会議に携わってきた。

実は、李氏は社会的に高い名声と地位を得てきた一方、これまでの自らの開発実践は数ヶ月程度の短期的なものが中心であったため、得られたデータや経験は整合性と深さに欠けていると感じていた¹⁴。そこで、ある地域に3年以上関わり、村落社会と深く接することでより完全な開発経験を得ることができると考え、李氏は2015年に「H実験」という雲南省のH村を対象とする貧困削減事業に着手した。

現在、この事業は「知識人による貧困削減」の成功例、そして「大地に書かれた最高の論文」等として多くの国内メディアに取り上げられるようになり¹⁵、中国で広く知られている。他方で、H実験は、開発をめぐる李氏の反省や思考を表しているものでもある。次章では、H村における開発実験に映る李氏の開発観を文献や現地調査の結果から解き明かしていく。

3 「H実験」に映される開発観

3.1 変貌するH村

H村は、中国の雲南省シーサンパンナ・タイ族自治州のモンラ県モンバン鎮にあるヤオ族の自然村であり、58世帯計204人が住んでいる¹⁶。狭い面積の畑でサトウキビ、トウモロコシやゴムを栽培することが主な生計手段であり、熱帯雨林の野生ゾウによる農作物被害やゴムの値下がりによって収入が不安定である。2014年、H村における一人当たりの平均年収は5800人民元（約9万円）程度で、全国レベルに比べると著しく低い¹⁷。

14 李小雲：在河辺村，我就是一個學習者

<https://ishare.ifeng.com/c/s/7xnhWkAaTMJ> (2020/10/8)

15 CCTV 点贊！大学教授跑去雲南大山，5年後写出“最牛論文”，看完心服口服！

http://news.cau.edu.cn/art/2019/12/27/art_8779_657301.html (2020/10/8)

16 地理的に近いラオスから嫁いだ女性8人と婿入りした漢族の男性2人以外は、全員はヤオ族である。

17 2015年当時、中国の農村住民の平均年収は1万1422元で、雲南省は8242人民

2014年、李氏は国内における貧困削減事業の現地調査ではじめてH村を訪問し、村の貧困状況と都市部との格差に強い衝撃を受けた（写真1）。李氏は、20年間も開発の研究を行ってきたものの、このような村で人びとと一緒に暮らしてその生活空間に入り込む経験がなかったことを心苦しく感じたという¹⁸。2015年3月、李氏は中国農業大学の人文・開発学部の学部長を辞任し、「モンラ小雲助貧センター」（以下、小雲センター）というNPOを立ち上げ、H村の事業に携わった¹⁹。

H村をどう開発していくべきか。李氏等の調査結果では、H村は畜産業やプランテーションを中心として生計を立てるアプローチだと、今の貧困状態から脱することが難しいと結論付けられた。その一方、熱帯雨林の自然環境やヤオ族の民族文化などは開発に値すると考えられた。ところが、H村は交通の便が悪く²⁰、一般の旅行者向けの観光地として売り込むことは難しい。以上のような村の状況を踏まえて議論を積み重ねた結果、H村における開発の方向性は、「会議型リゾートセンター」に定められた。つまり、村の生態環境や民族文化を資源として、国内外の会議やフォーラムを誘致し、その参加者向けの民泊施設群を開発することである。民泊という支柱産業のほか、養蜂、野菜栽培や家畜などの伝統的な生計手段も支援し、村人が食糧を確保しながら市場変動によるリスクに耐えられるような総合的な開発計画案が作られた。

元である（李・苑 2020: 9）。1人民元≒16円。

- 18 ドキュメンタリー「雲在河辺」より（出所：「小雲センター」のスタッフの提供）。
- 19 「小雲センター」が設立された当時、スタッフは3人しかなかった（会計1名、事業担当者2名）。その後、李氏の同僚・学生や建築系の専門業者を対象とするボランティアの募集によって人を集めたのである。
- 20 シーサンバナナの空港から村までタクシーで約4時間がかかる。公共交通機関を使う場合は、景洪市からモンバン鎮まで乗り換えながらバスで移動することができる。そして、モンバン鎮でH村の合作社（後述）に連絡すれば誰かが迎えにくる。その場合では、半日間以上がかかってしまう。



写真1 2015年のH村
 (「小雲センター」のスタッフの提供)



写真2 2019年のH村
 (筆写撮影)

この計画をもとに、村人の生活環境の改善、なかでも朽ちた住宅を民泊に建て替えることは「小雲センター」の活動の中心となった。「小雲センター」の事業方針は、政府による貧困削減の補助金や職員などといった行政が動員できる資源を土台に、NPOがサポート役として長期的に介入し、参加型開発のアプローチで農民の能力を高めながらその主体性を発揮させることである²¹。したがって、民泊の建築作業は主に専門家のデザインをもとに、村人が自力で行った。2017年4月に民泊の営業がはじまったが、2019年度のH村の収入は170万人民元を超え、村人の平均年収は8千人民元に達している(李・苑 2020)。

H村の大きな変貌は多くの新聞記事に掲載され、李氏に対するほかの村や地域からの指導要請が殺到している²²。しかし、李氏はH村の実験は経済的成果があったとはいえ、それを成功例として語ることに戸惑いを感じていた。その理由については後述するが、次項ではまず村で開発実践を行ってきた李氏の姿を村人の目から見ていく。

3.2 力強い介入者

「彼は教授だし。教授って都市でこもっている人間じゃない? な

21 H村における「小雲助貧」の展示版より。

22 H実験が有名になったことで、李氏は農村開発の人気者になっている。筆者がフィールドワークを行った当時、雲南省昆明市周辺の5村や湖北省の政府が李氏に指導を求めている。

ぜ山奥の村に来るのか。しかも『最も綺麗な部屋を作ってあげる』『最も優秀な人間を連れてくる』と言っている。…(略)最初、皆あり得ないと思った。しかし彼は本当に村にきて、雨の日でも村に住み込んだ。そして彼の学生も——博士や修士なのよ——たくさん来た。村人は驚いて、『まるで毛沢東時代みたいだね』と。それで、李先生²³は本気なのかもしれないと信じるようになった。」(HCへのインタビューより)

事業がはじまってから、李氏は「小雲センター」のメンバーや彼の学生を率いて長期間H村に滞在し、毎年の旧暦新年も必ず村人と過ごすようにしている。民泊をはじめとする事業を行うため村人の集会が数回開かれており、村人はその機会に自分の意見を聞いてもらえるため李氏に親近感を覚えた。村人は、李氏の開発計画は非常に緻密で、風通しや火事対策などといった自分たちでは思いつかないことも盛り込まれていたことに感心した。李氏とそのチームがはじめて村に来た時に村人はその動機を疑っていたが、等身大で献身的な姿は村人の心を掴んでいった²⁴。

そして、李氏は自らの情報源や人脈を活かして、大手企業の助成金、政府や非政府系のファンド²⁵などの多様な資金源から300万人民币元を超える事業資金を集めてきた。それによって、民泊の建築や内装の費用は十分に賄えた。「会議型リゾートセンター」という方針のもとで、李氏はH村の宿泊費を周辺地域に比べて二倍以上の高い値段に設定

23 村人は、李氏にかぎらず、外部からきた専門家や援助者を「先生」と呼んでいる。

24 李氏と対照的に、H村は地元政府やほかの援助者からは関心を持たれなかった。中国の政策は地方の政府職員が村まで足を運び、その貧困状況を把握することを求めているが、H村に政府職員が訪れたのは李氏が村に来た後のことだったと村人は言う。

25 例えば、テンセンや愛徳基金などがある。

し²⁶、農村開発に関係する中国国内外の会議や交流活動²⁷をH村で開催するようにアレンジしてきた。様々な会議を引き受けることで村人の現金収入が増えただけでなく、H村は中国における農村開発の経験を象徴する場所として有名になってきた。

「李先生がこんなにすごい人とは知らなかった」と村人は言う。村の開発に尽くす善意、村人の意見を尊重する態度、そして実際の経済的利益を村にもたらす力を持っている李氏に対して、村人はその指摘通りに事業を進めようとした。他方で、李氏の教えは事業にとどまらず、村人の生活スタイルにも影響を及ぼす。例えば、李氏は民泊の衛生や経営環境を整備するために、各家で犬と鶏を飼うことを禁止しただけではなく、トランプや飲酒についてもしないように説得している。

こうした李氏のカリスマ性が、開発事業の実施に力を添えたのは間違いない。だからといって、村人は李氏の開発計画を鵜呑みにした訳ではない。外部者の価値観と村落社会の慣習や生活様式のせめぎ合いはH村の開発にも著しく現れており、開発事業の持続可能性が懸念となる。次に、民泊事業の展開を中心に、李氏が自らの開発観を村に植え付ける過程を村人の話からひもとく。

3.3 現代と伝統を「接ぎ木」する

「私は開発の問題をさらなる開発の中で解決することを望む。私が唯一考えているのは、現代と伝統の二元対立を突破することだ。伝統を保ちながら伝統を現代に持ち込むことができないか、ということだ。…(略)それは多分、私の個人的な理想主義やロマン主義で、思想的根元はあまりない。」(李氏へのインタビュー資料より(注14))

26 宿泊費は部屋によって300人民元(シングル)と500人民元(スタンダード)に分けられ、食事込みの場合は1日100人民元が追加される。

27 アセアン村落リーダー交流プログラム(ASEAN+3 Village Leaders Exchange Program)はその例である。

李氏はいくつのインタビュー資料で自分は「開発主義者」だと宣言し²⁸、貧困な地域が市場経済や新たな産業を受け入れて現代社会との距離を縮めていくことの必要性を主張した。H村の開発についても、李氏は、伝統と現代が共存できるような道を探さなければならないと考えた。すなわち、伝統的な村落社会に都市の需要を受け入れるような現代的な基盤を作って、村主体の運営や持続可能な開発を支えることを重視しているのである。H村の開発計画からみると、いわゆる「伝統と現代」の接点となったのは、農村に対する都会人の牧歌的想像であり、その想像の実体は、熱帯雨林の自然環境、ヤオ族文化や田園的な生活様式を体験してもらうような民泊である。

前述のように、H村の民泊事業は新聞やメディアに高く評価されてきた。ところが、「小雲センター」が伝統的な住宅を再現するプランを始めて村で紹介した時、村人の反応はそれぞれであった。一部の人は元々伝統的な部屋が好きで、李氏が提示したプランに従った²⁹。他方で、都市やほかの村を訪れた経験から、煉瓦製の部屋を欲しがると村人も少なくない³⁰。専門家チームの説得や実際に利益を得た民泊が増えたため、その事業は最終的に完成した。

2019年2月に、民泊を中心とするH村の産業を運営するためのグループが立ち上げられた。そのグループは、現地で「合作社」と呼ばれており、村内の若い男性の5人がそのスタッフである³¹。その目的は、民泊の経営主体を「小雲センター」から村の若い世代に移し、村主体の

28 例えば、

李小雲：貧困の元問題は什麼？ <http://www.aisixiang.com/data/115640.html> (2020/10/8)

29 材料が集まった場合、一軒家を造るのに2ヶ月が必要だという。

30 木造のプランに対してH村の会計担当者はそれに反対して、さらに県政府に訴えたが、県政府はそれを跳ねのけた。

31 「合作社」は、村人が運営するグループである。小雲センターに属している訳ではないが、小雲センターの協力や管理を受けることがある。スタッフは民泊の収益から、毎月1500人民元の給料をもらっている。

持続可能な開発を実現することである。そのため合作社のスタッフを対象に、宿泊施設関係の研修や見学機会が多く設けられた³²。

他方で、合作社の創設はスタッフの日常生活の負担となる側面がある。合作社があるとはいえ、スタッフは各家庭内の仕事をしない訳にはいかない。農作業や家庭を養う力は、村において男性を評価する基準でもある。村人の中には、木や花を植えることをはじめとする合作社の仕事を負担に感じ、積極的に活動に参加しない人が多い。スタッフも合作社の仕事で多少給料をもらっているため、ほかの村人に協力を求めることにうしろめたさを感じている。結局、村全体で共に取り組むべき仕事は、合作社のスタッフが行った³³。合作社の仕事と家庭内の仕事の両立が難しい中、李氏の力を大いに借りたH実験が上手くいくかどうか不明であり、スタッフはどこまでその仕事に力を尽くすべきか迷った。

「李先生自身も、このプロジェクトが100%成功するとは思っていない。私は合作社のスタッフだが、『小雲センター』の仕事の、30年後の、その未来は見えない。なので、皆が頑張ろうとしているのを見て、私も貢献したいが、迷っている。自分が今やっていることを全部諦めてこの仕事に身を投じることができないからだ。…(略)農民は話が上手くないが、馬鹿ではない。自分で色々計算しているのだ。だがそれは、なかなか李先生に話せないね。」
(HZへのインタビューより)

32 一方、見学の対象地は主に北京や浙江省の高級な民宿だった。それらの地域は元々貧しい訳ではない。また、歴史を観光資源とするパターンが多く、H村が参考にするのは難しい経験であった。「この人は豊かだね」という印象が深く残ったが、その他の学びは少なかったと合作者のスタッフがい言う。

33 そのほか、民泊の収益分配によって揉め事を治める仕事もある。民泊の外装は統一されているが、部屋の内装はそれぞれの家に任された。各家の経済状況の違いによって部屋の整備状況や宿泊費の収入も異なっているためである。

「小雲センター」の努力はH村の外観を大きく変え、民泊の経営で儲けた家庭も多い。しかし、外部の訪問者もよく尋ねるように、「李先生が去ったら村はどうするか」という懸念を村人は抱えている。結局、これまで培ってきた村の伝統に現代的要素を加えた民泊事業は、村人の将来への不安を解消したとはいえない³⁴。

それに対して、李氏が来る前から頼ってきた親族や友人のネットワークは周りの村や地域まで広がっており、今日も村人の生活を支えている。村人はこうしたネットワークを通して、どこで日雇いを募集しているか、どの農産物が最近値上がりしているかなどの情報を収集しながら収入を保ってきたのである。村人にとって、親族や友人のネットワークを活かすことのように、自らの力で把握でき、しかも長い目でみると安定していると思える未来像こそ、彼らが求める豊かさだと考えられよう。



写真3 他村の親戚と共同作業
(筆者撮影)



写真4 携帯で動画を見る子供
(筆者撮影)

H村という実験場では、伝統に「接ぎ木」しやすい現代と、そうでない現代が浮かび上がった。農村と都市の生活空間が異なり、都会人にとって心地良い宿泊施設の経営を担う村人が育つまで時間かかっ

34 その不安は、H村の高い離婚率に反映されているといえる。離婚の多くは、女性が男性と別れようとしたケースである。「H村では未来が見えない」「自分の故郷の人に比べてこの男性はとてだるそうにしているし、向上心がない」からだと言っている。SNSが発達したことで、村の女性がインターネットで知り合った「より未来が見える」男性と駆け落ちするケースも耳にする（HYへのインタビューより）。

た。一方で、現代的技術の産物を村人に受け入れてもらうには、それほど努力を要しなかった。H村に電気が通ったのは2000年で、電気やインターネット環境の整備により素早く普及したのはスマートフォンである。その影響は親世代にとどまらず、子供にも及んでいる(写真4)。現在、H村の子どもは方言ではなく、綺麗な標準語を話している。その理由の一つは、子どもがスマートフォンでゲームやアニメから標準語を身につけたことである。そのほか、オンラインショッピングに夢中になる子どももいる³⁵。こうした「現代」は、あっという間にH村に浸透していったといえる。

4 H実験の成否、その意義

多くの時間や労力を注いで行われてきたH実験に対して、李氏はどう考えているか。

まず、農村部における貧困削減の困難を実感したという。伝統と現代を対立させるのではなく、その接点を見つけようとする理想は美しいものの、その実現は大変困難である。現代と伝統を接ぎ木する難しさは、人びとの慣習を変えることにあり、そしてその慣習は、ある地域従来の社会環境と生活様式に基づくものだからである(李・高2019)。どのようにしたら、H村が社会進歩の恩恵を受けながらも、現代的な弊害を避けることができるか。李氏とその門下生は、H村の経験をもとに、貧困問題の要因分析について多くの論文を書いてきたが、伝統と現代を接ぎ木する方法に自信のある答えはなかった。

また、介入者としての葛藤を感じていた。李氏は自分が事業を実質

35 今は農村部までの道路がほぼ整備されてきたため、インターネットで注文して3、4日すると購入した物がH村に届くという。4歳くらいのKHちゃんは、スマートフォンを見つけると、すぐに中国最大のオンラインショップである「タオバオ」のアプリを開き、ピンク色でおもちゃ柄の子供用のベットシーツやおもちゃを選びながら、「欲しい、欲しい」と親に叫び続けていた(筆者観察)。

的に主導してきたことを自覚している。「小雲センター」の介入によってH村の貧困削減は成果をあげた一方、介入者がいなくなると事業が持続できなくなることが最大の懸念である³⁶。開発の最終目的は、村人にとっての「より良い生活」を達成することであるにもかかわらず、「村にとって何が問題なのか、どうすれば改善できるか」については、研究者が持ち込むいわゆる客観的方法で測られている³⁷。介入者の役割と現地の人びとの主体性の間でバランスを取ろうとするジレンマは、悩ましいものだと李氏は述懐した（李 2018）。李氏によると、周りの同僚や友人は、彼のプライドが傷つかないように褒めてくれたり、または彼の長年の苦勞を考慮して批判的な言葉を抑えたりしたが、実は李氏の強制的な介入によって始められたH実験とその効果を認められない人がたくさんいたという（李 2018: 45）。

ところが、明確な答えがなく、自らの介入の正当性が疑われているにもかかわらず、H実験は今でも続いている。村人の話に反映されているように、H村における李氏の姿からは、こうしたジレンマをほとんど感じ取れない。それは、李氏の「開発主義者」としてのアイデンティティが何より強かったからだと考えられる。

生活条件が厳しかったH村にとって、経済成長を遂げて貧困から脱することの優先順位は最も高かった。したがって、李氏は、介入者は葛藤を感じていても、村を一刻も早く貧困状態から解放させるというプライオリティを疑ってはいない。村人の主体性が重要だとはいえ、H村のように深刻な貧困状態に陥った村に対して、政府や社会組織は様々な側面から介入せざるをえない（李・苑 2020）。さらにいえば、H村の開発は「実験」であるため、問題が生じかねない。李氏の言葉

36 CCTV-13番組『面对面』「李小雲：河辺村実験」。〈放送日：2020年10月18日〉

37 このジレンマは、道具的合理性を強調する実証主義と、主観的意味世界に基づく解釈主義の矛盾によって生まれた開発学における方法論上の課題だといえる。

を借りると、それらの問題は開発することで生じるものであり、さらなる開発の中で解決するしかない。今日のH村が抱えている最大の懸念は開発の持続可能性であり、それを乗り越えるために民泊経営の研修や技能訓練が今でも多く行われている。李氏が目指すH村の未来は、現代と伝統を接ぎ木する作業を継続することにほかならない。

李氏にとってさらに重要なのは、貧困削減の実践とともにH村における開発の過程やそれに関わる人びとの感想を書き残していくことだと考えられる。「小雲センター」は、H実験が始まった時点から、村における開発の経緯や各段階の状況を自らのホームページで積極的に発信してきた。H村が有名になったことで、その開発実践はさらに新聞、報告、随筆や学術論文などといった様々な形で取り上げられており、農村開発を議論するための材料となっている。村落社会に現代を植えつけようとする理想は実現できるのか、今のやり方は持続可能な開発につながるか。それらの質問に答えるには長期に渡る観察が必要であり、H村の成否は人びとの判断に委ねざるをえないことでもある。そして何より、H実験の価値は、その結果だけではなく、「小雲センター」が村の開発に長期的に携わって試行錯誤してきたこと自体にある。逆説的にいえば、H村に介入し開発を行う正当性は、「小雲センター」の事業理念、意思決定のプロセス、事業の実施過程やそこに感じた疑問などを世間に公開して共有することによって支持されるものでもある。

5 中国の開発学とは：仮説と今後の課題

本稿は、中国の「開発学の父」と呼ばれる李氏の開発観の形成をあぶりだしてきた。李氏はどのような文脈の中で開発学に携わり、どのように開発について考えているかを明らかにするために、彼が農学者から中国の代表的な開発学者になった過程、そしてその開発観を表すようなH実験の中身をひもといた。そのプロセスの中で、李氏の考え

は、個人レベルにとどまることはなく、「開発学の父」の名のもとで行われてきた開発実践、学校教育、大量の論文発表や書物の刊行によって、中国の開発学に影響を与えていると推察することができる。ここでは、すでに述べてきた李氏の開発観の形成を踏まえて、中国における開発学の特徴について3つの仮説を提示したい。

第1に、中国の開発学は、欧米から発した開発理論、方法やカリキュラムなどを鵜呑みすることから始まったが、国際社会における中国の存在感が高まることによって、開発学における中国の主体性が求められるようになった。李氏の経験に示されたように、自国の経済的・社会的状況の改善にしたがって、研究者の自己認識や他者認識も変わってくるからである。

第2に、中国の開発学の議論は、中国と西洋の違いから出発しているため、狭隘的な自他認識になりやすい。既存の文献を見ると、李氏が中国の開発学を特徴付ける時に、西洋以外の比較軸はほとんどなかった。他方で、「西洋」とは何か、「中国」とは何かについて、李氏による明確な定義はない。人為的な対立関係は、西洋・非西洋諸国と中国の開発実践の類似性を見逃し、開発をめぐる議論の幅を制限する可能性がある。例えば、H実験で見られた現代と伝統のせめぎ合い、介入者の葛藤や持続可能性の懸念などは、これまで欧米出身の開発学にも多く論じられている。しかし、李氏の研究では、それらの共通話題は、中国と西洋の対立的な論調を疑う素材にはならなかった。

第3に、今日の開発学は実務志向が強いと指摘されており (Bernstein 2006)、中国の開発学にも知識の実用性を重要視する傾向が見られる。しかし、中国の開発学が実務に向かう姿勢は、必ずしも理論と計画性を重視するような開発学と同じ訳ではない。李氏は、アフリカの現地経験から、これまでの「西洋的な開発学」が主張してきた平等の理念や相手の主体性を尊重することは、大きな経済格差がある中で偽善に近いものだと批判した。そして、援助者と被援助者の対等な関係は、

開発が計画される段階の先験的理論ではなく、開発が成功した後の結果である。H実験にも示されたように、李氏は、自分の相手に対する差別的な眼差しを自覚し、相手を対等に捉える前提となる経済的・社会的条件を開発で作り出すことを重要視している。その際、政府の力であれ、欧米から学んだ参加型開発であれ、中国の行政的資源であれ、過剰と思われる個人的な介入であれ、現地の生活改善につながるアプローチであればすべて動員される。その影響のもとに、中国の開発学の実務的志向は、「あるべき開発」を求めるのではなく、現実的に「ある・ありうる開発」の議論に重点をおくのではないかと推測する。

本稿は、李氏の個人的な開発観をひもといたものの、それが具体的にどのように中国の開発学に影響を与えていたかを実証することに至らなかった。中国におけるほかの開発学者の言説とその言説を支える根拠、大学教育としての開発学のカリキュラム分析、開発学と他分野の知的融合などを視野に入れながら、上記の仮説を検証し、中国の開発学の成り立ちを明らかにすることが今後の課題である。

参考文献

・ 英語

- Alvesson, M. (1993) *Cultural Perspectives on Organisations*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Becher, T. and Trowler, P. (2001) *Academic Tribes and Territories: Intellectual Enquiry and the Cultures of Disciplines* (2nd edition). Buckingham: Open University Press/SRHE.
- Bernstein, H. (2006) Studying Development/Development Studies, *African Studies*, 65(1): 45-62.
- Bräutigam, D. A. and Tang, X. (2009) China's Engagement in African Agriculture: Down to the Countryside, *The China Quarterly*, 199: 686-706.
- Knorr-Cetina, K. D. (1982) Scientific Communities or Transepistemic Arenas of Research?, *Social Studies of Science*, 12(1): 101-130.
- Mannheim, K. (1936[1929]). *Ideology and Utopia: An Introduction to the*

Sociology of Knowledge. London: Kegan Paul.

Thomas, A. (2000) Development as Practice in a Liberal Capitalist World, *Journal of International Development*, 12: 773-787.

・日本語

汪牧耘 (2020) 「『開発 = 开发 (カイファー)』の意味変容と概念形成：日中における言葉の借用を中心として」『国際開発研究』29(1): 89-99。

ブルデュー, P., 石崎晴己・東松秀雄訳 (1997) 『ホモ・アカデミクス』藤原書店。

・中国語

李小雲 (2018) 「扶貧能讓人致富嗎？」『中国鄉村發現』6: 42-45。

李小雲 (2019) 『發展援助的未來：西方模式的困境和中国的新角色』北京：中信出版社。

李小雲・高明 (2018) 「現代性与亚文化：深度性貧困少数民族群体消費与貧困的研究」『四川大學學報 (哲學社會科學版)』3: 37-46。

李小雲・齊顧波・徐秀麗 (編) (2005) 『發展學專業系列教材：普通發展學』社會科學文獻出版社。

李小雲・齊顧波・徐秀麗 (編) (2012) 『發展學專業系列教材：普通發展學 (第二版)』社會科學文獻出版社。

李小雲・唐麗霞・陸繼霞・徐秀麗・張伝紅・張悦・齊顧波 (2017) 『新發展的示範：中國援非農業技術示範中心的微觀敘事』社會科學文獻出版社。

李小雲・苑軍軍 (2020) 「脫離“貧困陷阱”：以西南H村產業扶貧為例」『華中農業大學學報 (社會科學版)』2: 8-16。

俞可平・庄俊举 (2004) 「熱話題与冷思考 (三十四)：關於“北京共識”与中国發展模式的對話」『當代世界与社会主義』5: 4-9。

張郁慧 (2012) 『中国对外援助研究 (1950-2010)』九州出版社。